

札幌市N30遺跡から出土した植物遺体

よしぎまさかず つばさかやすよ
吉崎昌一・椿坂恭代

1) 遺跡の所在と性格

遺跡の名称 : 札幌市 N30 遺跡

遺跡の所在地 : 北海道 札幌市 西区 二十四軒四条一丁目

発掘調査期間 : 平成8年(1996年)4月17日~8月31日

調査の主体 : 札幌市 市民局 文化部 文化財課 埋蔵文化財係 (札幌市埋蔵文化財センター)

発掘担当者 : 上野秀一

遺跡の年代 : 層位的に重なる3文化層が検出されている。上位より縄文時代晩期末大洞A式土器相当の第3文化層(07a,c層群), その下部に縄文時代後期末から晩期初頭の土器型式を含む第2文化層(08, 09層群), 最下層は縄文時代後期初頭から後期中葉の土器型式を含む第1文化層(10層群)が確認されている。

各層準の遺構に伴出した1年生植物遺体から, 次のような¹⁴C測定値が得られている。

07層(第3文化層)の炭化クルミ核片は, 2380 ± 100 yrs BP, 補正值は 2330 ± 100 yrs BP.

同一層準の酸化状態のタラノキ属種子は, 2250 ± 50 yrs BP, 補正值は 2250 ± 50 yrs BP.

08層(第2文化層)から得られた炭化物は, 3060 ± 80 yrs BP, 補正值は 3000 ± 80 yrs BP.

10層(第1文化層)から得られた炭化物は, 3520 ± 60 yrs BP, 補正值は 3450 ± 60 yrs BP.

検出された遺構: 竪穴住居2軒, 石組みを伴う炉跡7基, 土壇墓ないし土壇17基, 炭化物の集中箇所が17箇所, 石片の集中箇所が26箇所検出されたが, 他に柱穴が約1500本分認められている。これらの層準, 遺物特性については考古学的記載の第##章を参照されたい。

2) 扱った資料

分析用の土壌は, 第3文化層(7a-7e層)の竪穴住居跡・屋外炉・焼土・焼土粒の集中・炭化物集中・石片集中・ピットから, また, 第2文化層(8層)からは炭化物集中, 第1文化層では炭化物集中などから土採取されている。検出された種子の地点別詳細分析は, 本報告第##章発掘調査記載の項を参照にして頂きたい。諸データは, 同定された植物種子の種類や個数とともに, 第00表として作成しておいた。また, 酸化状態の種子には網掛けをしておいた。

採取した土壌サンプルは, フローテーション法で処理の後, 第一次選別作業を経て炭化植物遺体を抽出したものが送付されてきた。これを, 実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察し撮影を行った。

3) 検出された炭化種子について

アサ *Cannabis sativa* L. 図版1-1

第3文化層の2号竪穴住居跡内の焼土, 3号竪穴住居跡内のピットと屋外の焼土から出土している。第2文化層では, 屋外炭化物集中から出土した。第1文化層では, 1号竪穴住居跡内の炭層と屋外の焼土から出土している。図示した資料1は, 07a-HE086から出土したもの: 長さ2.1mm, 幅2.2mm, 厚さ1.8mm.

タデ属 *Polygonum* L. 図版1-2

第3文化層2号竪穴住居跡の焼土, 屋外の炭化物集中, 石片集中, 焼土からと第1文化層の竪穴住居跡内の炭, 屋外の土壇, 焼土から出土している。図示した資料2は, 第1文化層10-HP-01の炭から出土したもの: 長さ2.0mm, 幅1.35mm.

ナス科 SOLANACEAE 図版1-3

第3文化層の焼土から出土している。種子の粒形と表面組織の形態特徴から、ホオズキ属 *Physalis* L. に分類できる。図示した資料3は、第3文化層 07c-HE058 から出土したもの：長さ1.5mm,幅1.15mm,厚さ0.55mm

マメ科 LEGUMINOSAE 図版1-4a,4b, 5

第3文化層の焼土、炭化物集中からと第1文化層の1号竪穴住居跡内と屋外の焼土から出土している。種子の大きさと形態からみて、ヤブマメ *Amphicarpea bracteata* (L.) Fern. に類似するものと、ソラマメ属 *Vicia* L. に分類出来る2種類があるが、資料のダメージが大きく種類の特定は出来なかった。図示した資料4aは07c-HE038から出土したもの：長さ3.5mm,幅2.3mm,厚さ1.5mm。5は07c-DC03から出土したもの：長さ2.4mm,幅2.0mm。

バラ属 *Rosa* L. 図版1-6

第3文化層の屋外土壌と焼土から出土している。種子の形態みてハマナスであろう。図示した資料6は07c-HE080から出土したもの：長さ4.7mm,幅2.2mm,厚さ1.8mm。

ガンコウラン属 *Empetrum* L. 図版1-7

第3文化層で検出された竪穴住居跡内の焼土と屋外の焼土から出土している。加熱のダメージで亀裂が入っているが、種子形態の特徴からガンコウランであろう。図示した6は07c-HP02の焼土から出土したもの：長さ1.75mm,幅1.25mm,厚さ0.6mm。

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. 図版1-8・9

第3文化層の竪穴住居跡2号、3号内の焼土、屋外の焼土、炭化物集中、石片集中から出土した。この他に、第2文化層の炭化物集中と第1文化層の竪穴住居跡内の炭、屋外の土壌ならびに焼土粒の集中からも出土している。いずれの遺構から検出された種子も、炭化したものと酸化した状態のものが混在して出土している。ただし、果肉を残したもの(果実)は、すべて炭化した状態で発見されている。図示した8は07c-HE-080から出土した果実：長さ7.5mm,幅7.8mm。9は07c-HP03-焼土から出土した種子：長さ5.0mm,幅2.5mm,厚さ1.7mm。

マタタビ属 *Acctinidia* Lindl. 図版2-10

各時期の遺構から出土している。そのほとんどが酸化した状態で検出された。種子の形態と表面構造からサルナシ *Actinidia arguta* Planch. と見られる。図示した10は07c-HP03-炭化物集中から出土したもの：長さ2.4mm,幅1.2mm,厚さ1.0mm。

ニワトコ属 *Sambucus* L. 図版2-11

各時期の遺構で普遍的に出土している。そのほとんどは酸化した状態で検出された。通常、遺跡から出土するニワトコの種子は加熱炭化を受けず、酸化状態で検出されることが多い。ニワトコを利用する際のプロセスの相違かもしれない。11は07c-HP02-焼土から出土したもの：長さ2.3mm,幅1.25mm,厚さ0.8mm。

タラノキ属 *Aralia* L. 図版2-12

各時期の遺構から出土している。そのほとんどが酸化した状態で検出された。種子の形態と表面構造からタラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemann に分類できよう。図示した12は07c-HE-004から出土したもの：長さ2.1mm,幅1.0mm,厚さ0.7mm。

ミズキ属 *Cornus* L. 図版2-13

第3文化層住居屋外の焼土、土壌、第2文化層の炭化物集中から、炭化したものと酸化した状態のものが少量出土している。種子外形の特徴からミズキ *Cornus controversa* Hemsley であろう。13は07c-Pit 05から出土したもの：長さ3.8mm,幅3.6mm。

モクレン属 *Magnolia* L. 図版2-14a,14b

第3文化層の3号竪穴住居跡内焼土と、屋外の炭化物集中から出土している。大部分は酸化状態で検出されたが、少数の破片は炭化していた。種子粒形の示す特徴からホオノキ *Magnolia hypoleuca* Sieb.et Zucc. と見られる。図示した14a, 14bは07c-HP-03焼土から出土したもの：長さ7.6mm,幅7.8mm,厚さ4.1mm。

ブドウ属 *Vitis* L. 図版2-15a,15b、16a,16b

各時期の遺構から出土している。そのほとんどが酸化した状態で検出されたが、資料のダメージが大きい。種子の形態からはヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat に似る。図示した15aは土器の中から出土した果肉部分が残存しているもの。16a,bは07c-HE-068から出土したもの：長さ4.1mm,幅3.2mm,厚さ2.65mm。

ウルシ属 *Rhus* L. 図版2-17

第3文化層の3号竪穴住居跡内焼土、炭化物集中、土壙と屋外の焼土、石片（小剥片）集中から出土している。種子の形態からみてヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. であろう。図示した17は07a-DB-01から出土：23：種子の形態からはケシ科のではないかと思われる。

ガマズミ属 *Viburnum* L. 図版2-18a,18b

第3文化層の用途不明の遺構から炭化種子が1例だけ出土している。種子の形態からはカンボク *Viburnum sargentii* とも思われるが、よく分からない。07c層から出土したものを18a, 18bに図示した：長さ6.1mm,幅5.0mm,厚さ1.9mm。

コナラ属 *Quercus* L. 図版3-19

第3文化層の屋外の焼土、不明遺構ならびに第1文化層の焼土粒集中などから僅かに出土している。だが、子葉の大きさと表面組織の構造からは、コナラ属 *Quercus* L. のどの種類であるのかが特定は出来なかった。民族学的資料によれば、この仲間の一部の果実は、脱渋して食用に供されていたことが知られる。また、コナラ *Quercus serrata* Murray は、北海道では石狩低地帯まで分布している事が判明している。図示した資料19は07a-HE-039から出土した炭化した子葉：長さ14.8mm,幅11.5mm。

クルミ属 *Juglans* L. 図版3-20a,20b

各時期の遺構から果皮破片が普遍的に出土した。ほとんどが炭化して出土しているが、酸化状態のものもある。いずれも果皮が細かく砕かれた状態で検出されている。その破碎方法には、遺跡の時代や集落の性質によって若干の相違があるらしい。おそらく、クルミの利用方法に差があった可能性があると思われる。いずれ、資料の蓄積を待って論じたいと考える。20a, 20b は07a 焼土39から出土したもの。

その他の種子など

以上述べてきたものの他に、図版3-21は冬芽、22は07-C焼土8から出土したアサダ *Ostrya japonica* Sarg. かとと思われるもの：長さ5.0mm,幅2mm。図版23・25は手元に比較資料がないため同定できなかったもの。23：長さ2.1mm,幅1.6mm（7a-DCH012から出土）。25：長さ2.0mm,幅1.8mm,厚さ0.85mm（7c-HE006から酸化状態でまとまって出土）。図版24a,24b：種子の形態からはケシ科の仲間ではないかと思われる。第3文化層の7a-DB01, 7c-HE010,063, 7c-DC02,05から出土している。長さ1.8mm,幅0.9mm,厚さ0.8mm（7a-DB01から出土）。

4) 若干のコメント

栽培植物はアサを除き検出されなかった。その他の種子組成は、縄文時代から続縄文時代にかけての遺跡で、ごく普遍的に見られるものである。また、調査者は、今回検出された同一層準の炭化種子と酸化種子について、別々に分けて年代測定を実施、両者間に年代差のないことを確認した。おそらく両者には、埋積される以前の状況の差が大きいらしい。また、マタタビ、ニワトコ、タラノキ、ブドウなどの種子は、酸化状態で検出されたものが多く、炭化したものは極端に少ない。こうした出土状況は、他の遺跡でも同様である。おそらく、この差は種子本来の性質だけでなく、その利用方法が生食を中心とした状況の反映かもしれない。今後の事例の蓄積が待たれる。